

第2期中期目標期間に係る業務の実績に関する評価結果
国立大学法人東京芸術大学

1 全体評価

東京芸術大学は、我が国唯一の国立総合芸術大学として、創立以来の自由と創造の精神を尊重し、我が国の芸術文化の発展について指導的役割を果たすことを使命として教育研究と社会連携活動を推進している。第2期中期目標期間においては、国内外の芸術教育研究機関や他分野との交流等を行いながら、伝統文化の継承と新しい芸術表現の創造を推進すること等を目標としている。

中期目標期間の業務実績の状況は、「その他の目標」及び「財務内容の改善に関する目標」の項目で中期目標の達成状況が「非常に優れている」ほか、それ以外の項目で中期目標の達成状況が「良好」である。業務実績のうち、主な特記事項については以下のとおりである。

（教育研究等の質の向上）

企業との共同主催事業である藝大アーツイン丸の内を開催しており、美術学部の学生によるストリートウォールペインティング、教員による出張講義及びスタインウェイ・ピアノによる藝大コンサート等を行っているほか、音楽分野では日本全国の小中学生を対象に、地元でのレッスンを実施し、世界への飛躍につなげることを目指す早期教育プロジェクトを実施している。

（業務運営・財務内容等）

クラウドファンディング企画会社と提携して目標金額400万円を超える463万円の支援金を獲得し、バーミヤン東大仏の天蓋を飾っていた壁画「太陽神と飛天」の復元制作を実現するとともに、復元事業の文化的意義を広く周知している。

このほか、民間資金による長期借入金を活用した事業スキームにより、アトリエ・音楽練習室を完備した学生宿舎「藝心寮」を完成させ、近隣4大学の学生の入居も受け入れている。

（「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について）

別紙のとおり。

2 項目別評価

I. 教育研究等の質の向上の状況

<評価結果の概況>	非常に優れている	良好	おおむね良好	不十分	重大な改善事項
(I) 教育に関する目標		○			
①教育内容及び教育の成果等		○			
②教育の実施体制等		○			
③学生への支援		○			
(II) 研究に関する目標		○			
①研究水準及び研究の成果等		○			
②研究実施体制等		○			
(III) 社会連携・社会貢献、国際化等に関する目標	○				
①社会との連携や社会貢献	○				
②国際化		○			

(I) 教育に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育に関する目標」に関する中期目標（3項目）のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 各中期目標の達成状況

①教育内容及び教育の成果等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育内容及び教育の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標（3項目）のうち、2項目が「良好」、1項目が「おおむね良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した2項目のうち1項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された1計画を含む。

＜特記すべき点＞

（優れた点）

○ グローバル時代に即応した新たな芸術教育実践プロセス等の導入

グローバル時代に即応した領域横断かつ複合型の新しい芸術教育実践、伝統技術と現代における社会実践、国際共同カリキュラム等、多様なプロセスを導入し、教員・アシスタントスタッフ・学生が、ロンドン芸術大学（英国）等の連携協定締結校と大学を行き来し、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラム等を実施している。

○ 地域に貢献するアートプロジェクトの継続的实践

東京スカイツリーから浅草を結ぶ地域において、複合的な芸術分野のプロジェクトを実施することで、街全体をミュージアム化し、新しい形のコミュニケーションを創出し、地域に貢献する芸術環境拠点の形成と新しい芸術の発信地となる地域創成を目指す芸大・台東・墨田（GTS）観光アートプロジェクトを平成22年度から平成24年度の間を実施するなど、連携協力による複合芸術教育として、多くのアートプロジェクト等を継続的に実践し、地域に貢献している。

○ 美術研究科における海外の連携大学との共同授業、制作及び成果発表

美術研究科において、国内及び世界各国で開催される「国際芸術祭（ビエンナーレ・トリエンナーレ）」を舞台に、連携大学（ロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校（フランス）、シカゴ美術館附属美術大学（米国））の教員と学生による多国籍ユニット編成及びコラボレーションによる「共同制作プロジェクト」を各大学の正規の教育課程に位置付けて実行することを目的として、平成26年度に「グローバルアート国際共同カリキュラム」構築に向けた連携協定を締結し、海外の優れたアーティストを誘致している。また、平成27年度には連携大学と共同授業、制作及び成果発表を行う「グローバルアート国際共同カリキュラム」を開設し、新潟県で開催された国際芸術祭「越後妻有トリエンナーレ」等で成果を発表している。

（特色ある点）

○ 芸術系大学院博士課程学位授与の審査方法・プロセスの在り方の明確化

国内における芸術実践系博士プログラム・モデルを構築するため、芸術系大学院における学位授与プロセスの研究を立ち上げ、国内外における芸術系博士課程の学位審査及び授与システムに関する調査、指導体制及び評価体制の研究を行っている。また、平成24年度に実技系博士学位授与プログラムの研究成果発表会をシンポジウムとして実施するなど、博士課程学位授与の審査方法・プロセスの在り方の明確化に取り組んでいる。

②教育の実施体制等に関する目標

【評価結果】中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「教育の実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(3項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した3項目のうち2項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された2計画を含む。

<特記すべき点>

(優れた点)

○ 国際的な卓越教員の招へい

音楽分野では、英国王立音楽院(英国)、パリ国立高等音楽院(フランス)等の国際交流協定校等から平成27年度に延べ70名の教員を招へいし、学生の個人レッスン時間を大幅に拡充している。また、ベルリンフィルハーモニー管弦楽団等、高等教育機関以外の世界的な芸術機関からも継続的に一線級の音楽家を誘致するなど、国際的な卓越教員を招へいしている。これらの取組により、平成27年度の教員一人当たりの学生数は、大学全体として約2.7名となっている。

○ 公共的な場における芸術表現教育の実践

音楽分野では平成27年度に国内の自治体、教育機関、企業等から119件の依頼演奏を受け入れている。また、コンサートを行うだけでなく、伊達市吹奏楽きらめき事業である吹奏楽指導、青淵文庫で聴くファミリーコンサート&たてもものレクチャーのように、訪問地の小・中・高等学校で、演奏指導や音楽普及活動等を実施することで教育研究活動の成果を地域に還元し、公共的な場における芸術表現の教育を実践している。

○ 芸術と社会との新しい関係を提案する人材を養成する教育体制の整備

アートマネジメント、キュレーション、リサーチの3研究分野を持ち、専門領域によって分かれている芸術文化の様々な実践を横断的かつ有機的に結び付け、戦略的に企画・運営・発信し、芸術と社会との新しい関係を提案する人材を養成する国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻の平成28年度設置に向けて取り組んでいる。また、既存の美術研究科・音楽研究科では、実践的に社会と関係し、日本独自の制作手法を強みにした新しい芸術の価値を創出し、発信する人材を育成するグローバルアートプラクティス専攻、オペラ劇場で歌手に必要とされる歌唱技術、国際的に通用する身体表現及び語学能力等を修得できる、専門的なプログラムを展開するオペラ専攻の平成28年度設置に向けた教育体制の整備を行っている。

○ 美術学部における卓越教員の招へい

美術学部において、海外からのアーティストユニット誘致に対応して、平成27年度にはロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校、シカゴ美術館附属美術大学から12名の教授等を卓越教員として採用している。

○ 映像研究科における国際通用性のある教育課程の編成

映像研究科において、国際通用性のある教育課程の編成上の工夫として、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に海外から講師を招き、講義やワークショップ等を合計42件行っている。また、南カリフォルニア大学（米国）から通年で教員を招へいし、平成27年度に「映画学論」や「国際映像メディア論」を開講しているほか、アニメーション専攻では、平成23年度から芸術総合学校（韓国）と、平成24年度からは伝媒大学（中国）を加え、日中韓アニメーション共同制作を実施している。

○ 映像研究科における学生制作作品の入選

映像研究科において、第2期中期目標期間に学生が制作した作品が、ザグレブ国際アニメーション映画祭やバンクーバー国際映画祭等の国際的な映画祭で入選している。

③学生への支援に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

（判断理由） 「学生への支援に関する目標」の下に定められている具体的な目標（1項目）が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

（優れた点）

○ 新学生寮の整備及びグローバルサポートセンターの設置

平成25年度に30室の音楽練習室、16室のアトリエを完備する新学生寮の藝心寮を整備している。平成26年度に専任のコーディネーターやサポートスタッフ等を配置し、国際プロジェクトに係る企画立案及び支援、国際化教育及び海外留学支援、留学生教育に関する調査研究等を行うグローバルサポートセンターを設置している。また、音楽創造・研究センターでは、アントレプレヌール（音楽家のための起業家）支援の領域における国際的な動向を調査するとともに、音楽芸術に関する社会発信方法の開発、新時代の芸術創造を担う人材育成、様々なマニュアル等のツールの作成に取り組み、芸術系大学にふさわしい新しい学生支援の方向性を実現している。

(Ⅱ) 研究に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況が**良好**である

(判断理由) 「研究に関する目標」に関する中期目標(2項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 各中期目標の達成状況

① 研究水準及び研究の成果等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が**良好**である

(判断理由) 「研究水準及び研究の成果等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

○ 各芸術分野の芸術文化向上への貢献

美術分野では、平成25年度に設置したアートイノベーションセンターで、フランスの至宝と呼ばれている貴婦人と一角獣タピスリーを、日本初公開となる展覧会に合わせ、大学の特許技術により現物の質感を忠実に再現し、高精細複製作品として発表している。また、音楽分野では、平成24年度に行った「カーリユー・リヴァー+隅田川」公演において英国の作曲家、ベンジャミン・ブリテンが完成させた教会オペラであるカーリユー・リヴァーをロンドン及びサフォーク州のオーフォードで、英国の演出家、指揮者、スタッフ及び大学の声楽、器楽、邦楽という専攻を越えた教員の連携により、2曲の比較同時上演を行っている。また、映像分野では教員の映画監督作品である岸辺の旅が、平成27年度の第68回カンヌ国際映画祭に出品され、監督賞を受賞するなど、国際的にも高い評価を得ている。

○ 美術学部・美術研究科における新たな高精度の複製技術の開発

美術学部・美術研究科において、第2期中期目標期間に、デジタル技術と日本画等の伝統技法を融合した新しい高精度の複製技術を開発し、特許を取得している。この「触れる文化財」、「クローン文化財」を制作する技術を活用し、世界遺産にも登録されている高句麗古墳群の巨大な壁画に描かれた「四神図」の複製に取り組み、30年前のフィルムから原寸大の鮮明な壁画画像を蘇らせ、石室全体の復元に世界で初めて成功するなど、その研究成果を多くの文化施設や展覧会において発表している。

○ 映像研究科における水準の高い国際的な賞の受賞

映像研究科において、第2期中期目標期間に受賞した賞の件数は、国際的な映画祭やフェスティバル、学協会からの賞を含めて合計41件、教員一人当たり2.5件となっており、単に国際的な受賞の数が多いというだけでなく、第68回カンヌ国際映画祭「ある視点」部門監督賞の受賞等、国際的に評価の高い賞が含まれている。

(特色ある点)

○ 総合芸術アーカイブセンターの設置

全学的な循環型芸術アーカイブを確立することを目的とする総合芸術アーカイブセンターを平成23年度に設置し、情報システム研究、美術情報(3Dデータ)研究、音響・映像データ研究、大学史文書史料研究の4つのプロジェクトに分かれて、分野を超えて連携を図り、研究を行っている。

○ 他分野、他領域、他機関と連携した新たな研究創造分野の開発

平成27年度に順天堂大学との間で連携・協力協定を締結して音楽セラピー等の共同研究を実施するなど、他分野、他領域、他機関との連携を通じて、科学技術等を取り入れた新しい研究創造分野を開発している。

②研究実施体制等に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「研究実施体制等に関する目標」の下に定められている具体的な目標(1項目)が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(優れた点)

○ 海外の大学・研究機関との連携関係の構築

国際的なネットワークを活かした学生・研究者支援策を更に拡充していくために、文化財の保存修復分野の研究を行っている敦煌研究院(中国)やベルリン芸術大学(ドイツ)等、海外の美術大学、音楽大学及び研究機関と連携関係を構築している。その結果、国際交流協定校・機関数は平成21年度末の43大学・機関から平成27年度末の63大学・機関へ増加しており、世界各地の大学・機関との国際交流を推進している。

(Ⅲ) その他の目標

(1) 社会連携・社会貢献、国際化等に関する目標

1. 評価結果及び判断理由

【評価結果】 中期目標の達成状況が非常に優れている

(判断理由) 「その他の目標」に関する中期目標(2項目)のうち、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

2. 各中期目標の達成状況

① 社会との連携や社会貢献に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が非常に優れている

(判断理由) 「社会との連携や社会貢献に関する目標」の下に定められている具体的な目標(2項目)のうち、1項目が「非常に優れている」、1項目が「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。

<特記すべき点>

(特色ある点)

○ 早期教育プロジェクトの実施

第2期中期目標期間に毎年度、企業との共同主催事業である藝大アーツイン丸の内を開催しており、平成27年度に美術学部の学生によるストリートウォールペインティング、教員による計7回の出張講義及びスタインウェイ・ピアノによる藝大コンサート等を行っている。また、音楽分野では日本全国の小中学生を対象に、地元でのレッスンを実施し、幼少期から継続的・段階的に指導を行うことで優れた才能を開花させ、世界への飛躍につなげることを目指す早期教育プロジェクト(EEP: Early Education Project)を実施している。平成25年度に選抜した弦楽・管楽の学生15名と教職員6名をジュネーヴ音楽大学(スイス)に派遣、合同オーケストラを組織し、現地でオーケストラや室内楽の演奏を行っている。また、ジュネーヴ音楽大学の学生・教員を日本に招へいし、大阪及び東京で交流演奏会を実施している。このような企業、自治体、海外の関係機関等との連携により、第2期中期目標期間に213件の受託事業、10件の早期教育プロジェクトを行うなど、芸術に関する多様な実践プロジェクトを実施している。

○ 音楽学部・音楽研究科における各種演奏会の開催

音楽学部・音楽研究科において、大学附属の演奏芸術センターによる「藝大21」、「奏楽堂シリーズ」及び「藝大プロジェクト」の各種演奏会は、作曲家の全体像を捉える包括的な選曲、商業ベースに乗らないため演奏される機会の少ない作品の演奏、啓蒙プログラム、邦楽アンサンブルを基調とした新しい創造の試み等、大学の特色や強みを活かした企画となっており、個々の教員の個人的な研究活動をベースとしつつ、学生も交えた大学の総力を挙げた取組となっている。

(特色ある点)

○ 教育研究成果の発表を通じた社会還元

大学美術館では、大学院美術研究科博士審査展等の学部・大学院の卒業・修了時に実施する卒業・修了制作展、博士展を行うなど、第2期中期目標期間に129件の展示会を開催している。また、奏楽堂では、藝大学生オーケストラ定期演奏会等の音楽学部・音楽研究科の教育課程として実施する学内演奏会、修士リサイタル、博士リサイタル、卒業・修了時に実施する卒業演奏会及び大学院学位審査会等、第2期中期目標期間に567件の演奏会等を開催するなど、教育研究成果を社会へ還元している。

② 国際化に関する目標

【評価結果】 中期目標の達成状況が良好である

(判断理由) 「国際化に関する目標」の下に定められている具体的な目標(3項目)のすべてが「良好」であり、これらの結果を総合的に判断した。なお、「良好」と判定した3項目のうち2項目は「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された4計画を含む。

<特記すべき点>

(特色ある点)

○ 新たな分野横断・融合型研究組織の設置

平成26年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援藝大力創造イニシアティブ事業の目標達成に向け、平成27年度に分野横断・融合型の研究を一層推進するため、教育組織と研究組織を分離し、芸術表現学系・芸術理論学系・芸術資源学系の3つの系により構成される教員組織として芸術研究院を新設するなど、研究教育組織の見直しを行い、海外の芸術系大学・機関等から延べ169名のアーティスト・クリエイターを教員・特別講師として招へいしている。

○ 国際共同カリキュラムの構築への取組

国際舞台で活躍できる芸術家育成のための人材育成プログラムの開発として、美術分野では平成26年度にロンドン芸術大学、パリ国立高等美術学校及びシカゴ美術館附属美術大学と国際共同カリキュラム(ジョイント・ディグリー)構築に向けた連携協定を締結している。この協定を受けて平成27年度に東京とパリ、ロンドン、シカゴにおいて、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラムを実施し、27名の学生が参加している。また、音楽分野では平成27年度にリスト音楽院(ハンガリー)と大学間交流協定を締結し、共通学位の構築に向けて協議を進めるなど、国際共同カリキュラムの構築に取り組んでいる。

○ アジア全域における広範なネットワーク形成の推進

国内及びアジアの芸術系大学との多様な交流を強化し、アジアにおける芸術大学の拠点としての地位を確立するため、平成22年度から東京藝術大学アジア総合芸術センター事業を展開している。事業の成果として平成24年度に日本、韓国、台湾、モンゴル、インドネシア、ベトナム、タイ、シンガポール及びマレーシアから計23大学の学長等を招き、藝大アーツ・サミット2012を開催している。また、平成26年度に開催した藝大アーツ学生サミット2014では、日本、中国、韓国で芸術を学ぶ81名の学生が共同制作、演奏会を通して交流を深め、外部に向けて日中韓学生共作の美術・音楽・映像作品を披露するなど、アジア全域におけるより広範なネットワーク形成を推進している。

○ 芸術系大学ブランディング・システムの開発

国際プレゼンスの確立及び国際発信を目的として、芸術分野固有の観点・指標等に基づき、芸術系大学の相対的な強み・特色等を明確化する芸術系大学ブランディング・システムの開発に取り組んでいる。平成26年度に戦略企画インテリジェンスユニットを設置し、近年の芸術系大学の取組、海外における評価制度の実態等、先導的ブランディング・システムの構築に関する指標の整理・予備調査・分析を実施している。また、愛知県立芸術大学、京都市立芸術大学、金沢美術工芸大学、沖縄県立芸術大学に事前調査等を実施し、システム構築の試行を実施したほか、世界大学ランキング等を運営する学外機関とも協議を進め、芸術系大学の評価に係る共同研究に向けた連携体制を構築している。

○ 海外実践型の研修授業の実施

海外留学及び海外研修の支援策の一つとして、各国の芸術祭や音楽祭への参加、海外芸術系大学との共同制作・演奏等、教員が専門分野の特色を活かして企画する海外実践型の研修授業Arts Study Abroad Program (ASAP) を平成26年度から実施している。平成27年度にカンボジア石造世界遺産現場体験型プログラム等、計11件の活動に86名の学生が参加している。また、参加学生に海外派遣奨学金を給付するなど、日本人学生の海外留学支援に係る学内体制の整備、教育プログラムの構築・実施、経済的支援制度の拡充及び情報発信等を行い、国際交流増進に結び付く基盤整備を進めている。

○ 美術学部における海外からの教員等の招へい

美術学部において、海外から多数の教員、アーティストを招へいし、特別講義、ワークショップ、研究会を実施しており、平成27年度には延べ23名の教員及びアーティストを招へいしている。また、国際交流協定校等は平成21年度の31校から平成27年度の46校へ増加している。

（特色ある点）

○ スペシャルソリストプログラム制度の導入

入試改革及び人材育成プログラム改革の一つとして、高校2年生からの飛び入学を起点として展開するスペシャルソリストプログラム（SSP：Special Soloist Program）制度を平成28年度から導入することとし、個人レッスンの時間を通常カリキュラムから倍増するなど、5つの特別カリキュラムを整備している。これにより、最短で学士課程を2年早く卒業することが可能となり、入学に年齢制限を設けている海外の大学へ留学できるなど、卒業後の円滑な海外展開に寄与する制度構築に取り組んでいる。

（2）附属学校に関する目標

附属音楽高等学校は、将来の優れた演奏家や作曲家を育てるため、カリキュラムや入試方法の改善を図るとともに、教員の教育・研究能力の向上や、音楽学部との連携を強化し、学校運営の向上と充実を図ることを目標としている。

大学・学部との連携については、国立大学附属学校として、地域等における指導的あるいはモデル的学校となるよう、大学・学部と附属学校が連携して、芸術分野における附属学校での先導的な教育研究を実施するための具体的な計画の立案・実践が行われている。

<特記すべき点>

（優れた点）

○ 高大連携による取組

早期専門教育プログラムを大学と連携して充実させるため、大学が導入している飛び入学制度やSSP（Special Soloist Program：世界的な音楽文化振興に対して生涯にわたり貢献する個性的・先駆的な国際的音楽家を育成する取組）と有機的に連動した早期音楽教育の機能強化や藝大生をピアサポーターとしたキャリア支援を行っている。また、自治体との連携の下で小中校生を対象に国内全域で展開される早期教育プロジェクトへの藝大生の参画など、将来世界的に活躍できる音楽家となる逸材を発掘すべく、高大連携による総合的な早期音楽教育プログラムとして研究開発を行うため全学体制での検討を行い、平成28年度スーパーグローバルハイスクールの指定を受けることに繋がっている。

Ⅱ. 業務運営・財務内容等の状況

<評価結果の概況>

	非常に 優れている	良 好	おおむね 良好	不十分	重大な 改善事項
(1) 業務運営の改善及び効率化		○			
(2) 財務内容の改善	○				
(3) 自己点検・評価及び情報提供		○			
(4) その他業務運営		○			

(1) 業務運営の改善及び効率化に関する目標

①組織運営の改善、②事務等の効率化・合理化

【評定】中期目標の達成状況が良好である

(理由) 中期計画の記載11事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。「戦略性が高く意欲的な目標・計画」に認定された計画(2事項)についてはプロセスや内容等も評価)

<特記すべき点>

(優れた点)

○ グローバル展開のための新たな人事・給与システムの構築

芸術分野固有の教育研究スタイルに応じた弾力的な雇用環境を創出するため、平成26年度に業績給制度を組み入れた年俸制職員給与体系に見直すとともに、海外からのアーティストユニット誘致に対応した「卓越教員」に係る就業規則やクロス・アポイントメント制度に関する規則を平成26年度に整備している。これらの柔軟な人事制度を活用し、新進気鋭の若手芸術家の採用、海外一線級の研究者等の雇用、業績を給与に明確に反映する年俸制適用教員の拡充等、人材獲得に努めた結果、平成27年度には若手芸術家10名、卓越教員等を30名雇用している。

○ 学長を補佐する戦略企画インテリジェンスユニットの設置

大学改革・機能強化を推し進めるため、学長の強力なリーダーシップを補佐するための組織として、学長直下に「戦略企画インテリジェンスユニット」を平成27年度に設置し、専任の教員2名を配置している。このユニットを活用し、国際芸術創造研究科アートプロデュース専攻をはじめとする、グローバル人材育成を牽引するための複数の教育研究組織の設置を決定しているほか、国内外から招へいした一線級のアーティストユニットを新専攻等に重点的に配置するなど、学内資源の戦略的な配分を行っている。

○ 新たなアクションプランの策定及び実行

学長のリーダーシップの下、グローバル展開を基軸とした新たな戦略・アクションプランとして「東京藝術大学 学長宣言2014～目指すは“世界の頂”～」及び「東京藝術大学 大学改革・機能強化推進戦略～“世界の頂”へと飛躍するための新たな挑戦～」を平成26年度に策定しており、これらに基づき美術分野におけるグローバルアート国際共同カリキュラム構築に向けた連携協定書の締結等を行っている。また、これらの戦略・取組等を構成員及び広く国際社会に対して周知するため、ウェブサイトに掲載するとともに、教職員を対象とした全学説明会を複数回実施し、学長及び理事から説明を行っている。

(2) 財務内容の改善に関する目標

①外部研究資金、寄附金その他の自己収入の増加及び資産の運用管理の改善、②経費の抑制

【評定】 中期目標の達成状況が非常に優れている

(理由) 中期計画の記載7事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるとともに、クラウドファンディングを活用した壁画復元プロジェクトを成功させていること等を総合的に勘案したことによる。

<特記すべき点>

(特筆される点)

○ クラウドファンディングを活用した壁画復元プロジェクトの成功

平成13年に破壊されたバーミヤン東大仏の天蓋を飾っていた壁画「太陽神と飛天」を、大学の特許技術を活用して原寸大で完全復元するため、教員等の個々の作品制作や演奏活動等において一般的な資金調達方法となっていたクラウドファンディングを大学として試行的に採用することとし、平成27年度にクラウドファンディング企画会社と提携して目標金額400万円を超える463万円の支援金を獲得し、復元制作を実現している。さらに、クラウドファンディングを活用し広く援助を募ることにより、支援金調達と同時に復元事業の文化的意義を広く周知する効果も得られており、評価できる。

(3) 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標

①評価の充実、②情報公開や情報発信等の推進

【評定】 中期目標の達成状況が良好である

(理由) 中期計画の記載7事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

<特記すべき点>

(優れた点)

○ 情報発信の強化

平成26年度にウェブサイトのリニューアルを行い、スマートフォン等のあらゆる端末に対応させるとともに、各研究室から迅速な情報発信を行うことができる体制を構築している。また、プレスリリースなど対外的にアピールする情報をタイムリーに発信するほか、平成27年度はウェブサイトの更新回数を従来の2倍以上となる193回とするなど情報発信を強化した結果、ウェブサイトの閲覧数はリニューアル前の約3.5倍となる年間約190万件となっている。

(4) その他業務運営に関する重要目標

①施設設備の整備・活用等及び安全管理、③法令遵守

【評定】 中期目標の達成状況が良好である

(理由) 中期計画の記載8事項すべてが「中期計画を上回って実施している」又は「中期計画を十分に実施している」と認められるとともに、下記の状況等を総合的に勘案したことによる。

<特記すべき点>

(優れた点)

○ 民間資金活用による学生寮「藝心寮」の設置

学生寮の整備事業として、老朽化が著しく建替え時期が到来していた学生寮「石神井寮」を廃止し、上野・千住・取手の各キャンパスから利便性が高い東京都足立区に、民間資金による長期借入金を活用した事業スキームにより、アトリエ・音楽練習室を完備した学生宿舎「藝心寮」を平成26年3月に完成させている。近隣4大学の学生の入居も受け入れており、入居を開始した平成26年度においては約96%、平成27年度は100%と高い入居率となっている。

「戦略性が高く意欲的な目標・計画」の取組状況について

○ 実技を伴う芸術分野の大学院博士課程における学位授与の在り方の明確化を目指した計画

国内における芸術実践系博士プログラム・モデルを構築するため、芸術系大学院における学位授与プロセスの研究を立ち上げ、国内外における芸術系博士課程の学位審査及び授与システムに関する調査、指導体制及び評価体制の研究を行っている。また、平成24年度に実技系博士学位授与プログラムの研究成果発表会をシンポジウムとして実施するなど、博士課程学位授与の審査方法・プロセスの在り方の明確化に取り組んでいる。

○ 世界一線級のアーティストユニットを誘致し、国際共同カリキュラム構築等を通じた国際水準の芸術系人材育成を推進するとともに、国際的芸術系教育研究拠点としての機能強化を目指した計画

国際舞台で活躍できる芸術家育成のための人材育成プログラムの開発として、美術分野では平成26年度にロンドン芸術大学（英国）、パリ国立高等美術学校（フランス）及びシカゴ美術館附属美術大学（米国）と国際共同カリキュラム（ジョイント・ディグリー）構築に向けた連携協定を締結している。この協定を受けて平成27年度に東京とパリ、ロンドン、シカゴにおいて、共同授業・制作・成果発表を行うグローバルアート国際共同カリキュラムを実施し、27名の学生が参加している。このほか、大学改革・機能強化を推進するため、学長を補佐する組織として平成27年度に設置した「戦略企画インテリジェンスユニット」を活用し、戦略的なブランディングシステム構築に向けたIR機能の強化に取り組むとともに、国内外から招へいしたアーティストユニットの学内への重点配置や新たな教育研究組織の設置決定等、学内資源の戦略的な配分に取り組んでいる。また、平成26年度に業績給制度を組み入れた年俸制職員給与体系を構築し、一部の教員に適用するとともに、平成27年度にはクロスアポイントメント制度及びテニュアトラック制度の導入を行っている。

○ 上野の杜を中核とした藝大力創造イニシアティブの展開による国際ネットワーク基盤を活かした国際共同プロジェクトの実施や、芸術系大学におけるブランディングシステムの構築等の取組を通じて、グローバル人材育成機能等を強化するとともに、世界ブランド藝大を目指した計画

平成26年度に採択されたスーパーグローバル大学創成支援藝大力創造イニシアティブ事業の目標達成に向け、平成26年度に戦略企画インテリジェンスユニットを設置し、近年の芸術系大学の取組、海外における評価制度の実態等、先導的ブランディングシステムの構築に関する指標の整理・予備調査・分析を実施している。平成27年度に分野横断・融合型の研究を一層推進するため、教育組織と研究組織を分離し、芸術表現学系・芸術理論学系・芸術資源学系の3つの系により構成される教員組織として芸術研究院を新設するなど、研究教育組織の見直しを行っている。